



第28回
堺市所蔵
美術作品展

徳高 太郎岡



第28回堺市所蔵美術作品展
「高岡徳太郎—昭和を生きた堺の洋画家—」

執筆：荻山愛華（堺市文化観光局文化国際部文化課学芸員）
発行日：2026年9月12日
発行：堺市文化観光局文化国際部文化課
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
TEL:072-228-7143

【表紙作品】高岡徳太郎《漁村》1979年 堺市蔵／《千利休ローズちゃん》2006年 高島屋史料館蔵／《与謝野晶子ローズちゃん》2006年 高島屋史料館蔵

昭和を生きた堺の洋画家

TAKAOKA TOKUTARO

第28回堺市所蔵美術作品展

「高岡徳太郎－昭和を生きた堺の洋画家－」

〔会期〕2026年9月12日（土）→ 10月18日（日）

〔会場〕さかい利晶の杜 企画展示室

〔主催〕堺市

〔共催〕さかい利晶の杜

〔協力〕株式会社高島屋、高島屋史料館

〔後援〕一陽会、堺美術協会、堺市教育委員会

ごあいさつ

堺市では、市民の皆様をはじめ多くの方々に、堺の文化芸術にふれていただくため、毎年「堺市所蔵美術作品展」を開催しています。本展では、堺で生まれた洋画家・高岡徳太郎（1902～1991）の初期から晩年までの画業を紹介します。

高岡徳太郎は、幼少から20年間でここ堺で過ごしました。父の影響で絵を描くことが好きだった徳太郎少年は、13歳で府立堺中学校（現在の府立三国丘高等学校）を中退し、大阪の天彩画塾で松原三五郎（1864～1946）に西洋画の基礎を学びました。上京後は、岡田三郎助（1869～1939）たちが主宰していた本郷洋画研究所などの養成機関に通い、本格的に油絵を勉強しました。1923（大正12）年に関東大震災に遭い、帰阪後は高島屋大阪店宣伝部に勤め、催し物のポスター原画の制作などを担当しました。のちにマスコット「ローズちゃん」の原型や同店の包装紙と手提げ袋（三代）の図案となった「ばら」を手掛けました。また、仕事をしながら関西初の洋画専門学校であった信濃橋洋画研究所に通い、さらに研鑽を積みしました。

1934（昭和9）年に洋画家・林武（1896～1975）と一緒に渡仏し、帰国後は精力的に作品を発表し、二科展で入賞するなど着々と実力を伸ばしました。戦後は、同じ二科会会員であった東郷青児（1897～1978）と一緒に二科会の再建に尽力し、脱会後は新しい美術団体「一陽会」を結成しました。さらにマネキン人形などをデザインする会社「ノバ・マネキン」を立ち上げるなど、画家やデザイナーとしての枠を超え、多方面で活躍をみせました。

本展では、高島屋大阪店宣伝部時代の作品や晩年の堺の港風景を想い描いた代表作まで、高岡徳太郎の幅広い作品から画業を振り返ります。また、本年は昭和元年から満100年（昭和100年）を迎えます。高岡徳太郎の画業をとおして激動の時代であった昭和を思い起こす機会となりましたら幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたりまして、ご協力いただきましたご遺族の方々をはじめ、貴重な作品をご出品くださいましたご所蔵者関係者各位に心より御礼申し上げます。

令和8年9月

主催者

謝辞

本展の開催にあたりまして、多大なご協力を賜りました下記の皆様に心より御礼申し上げます。また、ここにお名前を記すことを控えさせていただきました皆様に深く感謝の意を表します。

(順不同、敬称略)

高岡徹	高井多佳子	一陽会
佐竹寛	堀尾充代	堺美術協会
舘野弘	大槻晃実	株式会社高島屋
中野奈津美	小林麻衣子	高島屋史料館
伊藤誠人		芦屋市立美術博物館

目次

ごあいさつ	3
謝辞・目次	4
I 天彩画塾から渡仏へ	5
II 高岡徳太郎と高島屋	7
III 二科会再建から一陽会結成へ	11

[凡例]

- ・本冊子は、第28回堺市所蔵美術作品展「高岡徳太郎—昭和を生きた堺の洋画家—」（会期：2026年9月12日～10月18日）の出版作品を一部掲載したものである。
- ・図版No.は、必ずしも出版作品No.と一致しない。
- ・図版には、作家名、資料名、制作年、法量(cm)、技法・材質、所蔵先、出品歴を明記した。
- ・執筆は、荻山愛華（堺市 文化観光局 文化国際部 文化課 学芸員）が行った。
- ・編集は、堺市 文化観光局 文化国際部 文化課が行った。

I

天彩画塾から渡仏へ

高岡徳太郎（以下、高岡）は、1902（明治35）年7月27日、堺市材木町東（現・堺市堺区材木町東）にて刃物、金物類の販売店を営んでいた父・政次郎と母・せいの長男として生まれました。父・政次郎が絵を描くことが好きであったこともあり、幼い頃より絵画を身近に感じる環境で育ちました。

1915（大正4）年、高岡は府立堺中学校（現・府立三国丘高等学校）に入学しますが、13歳という若さで早くも画家になることを決意し、学校を中退します。中退後は、西洋画の基礎を学ぶため、当時大阪で人気の高かった天彩画塾に入門し、松原三五郎（1864～1946）に師事します。上京後は、岡田三郎助（1869～1939）が代表を務めた本郷洋画研究所などの養成機関に通い、本格的に油絵を勉強します。

1923（大正12）年関東大震災に遭い、帰阪後は高島屋大阪店宣伝部に勤めながら、信濃橋洋画研究所に入所し、小出^{こいで}^{ならしげ}重（1887～1931）の下で自分らしい油絵を摸索します。高島屋大阪店宣伝部を退職後、缶詰の製造を行っていた祭原商店に転職し、1934（昭和9）年に洋画家の林武（1896～1975）と一緒に渡仏します。高岡は現地の作品にみられる鮮烈な色彩に驚き、洋画独特の色彩による表現を意識するようになります。

本章では、滞欧期間からその後の作品をとおして、作風の変化をみていきます。

1

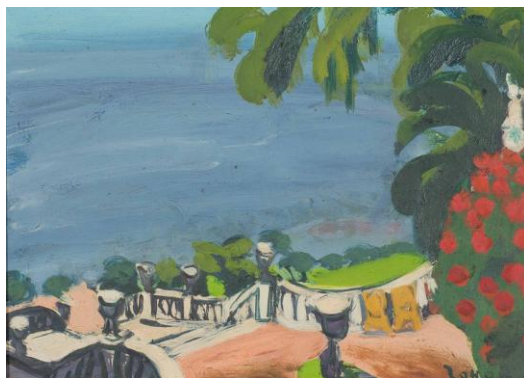
高岡 徳太郎
田舎
1934（昭和9）年
53.0×80.3
油彩・カンヴァス
堺市蔵
第22回二科展



本作は、フランスのパリ南部に位置する町の風景を描いた作品です。洋画家・林武と一緒に滞欧した際に描いた作品で、高岡が田園や野原が広がる景色を大変気に入り、近くのホテルに泊まり込み描きました。木々が生い茂る様を絵具の厚み（マチエール）で表現し、建物は色の対照をはっきりさせることで立体感を出しています。

2

高岡 徳太郎
南仏蘭西風景
1934（昭和9）年頃
22.5×31.4
油彩・カンヴァス
堺市蔵



II

高岡徳太郎と高島屋

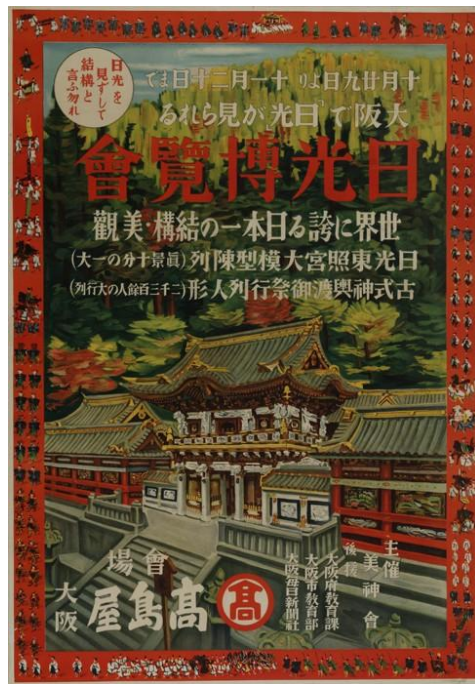
1923（大正12）年、関東大震災で被災した高岡は堺に戻り、絵の勉強を続けます。仕事を探していた高岡は、府立堺中学校の先輩であった飯田慶三（後に株式会社高島屋四代社長就任）を頼り、高島屋大阪店宣伝部に入社します。仕事は催し物のポスター原画の制作をはじめ、広告印刷物のカット描きやショーウィンドーのディスプレイなど多岐にわたりました。この時に経験した様々な仕事は絵画表現の幅を拡げ、また高岡が商業美術に目を向けるきっかけになりました。1931（昭和6）年、高岡は8年間勤めた高島屋大阪店宣伝部を退職しますが、その後も飯田と一緒に高島屋の仕事をするなど繋がりが途絶えることはありませんでした。

高岡は、1954（昭和29）年にマネキン人形の製作や、デパートの売場やショーウィンドーのディスプレイなどを請け負う会社「ノバ・マネキン」を設立します。後に、高島屋のマスコット「ローズちゃん」の原型を生み出しました。また、1980（昭和55）年には包装紙や手提げ袋のデザイン図案となる「ばら」を手掛けました。

本章では、高島屋大阪店宣伝部時代に手掛けたポスターの原画をはじめ、高島屋を象徴するバラを描いた作品、また堺ゆかりのローズちゃん人形を紹介します。

3

高岡 徳太郎
ポスター「大阪で日光が
見られる 日光博覧会」（原画）
1927（昭和2）年
107.0×75.0
高島屋史料館蔵



本作は、高島屋大阪店（長堀店）で開催された「日光博覧会」のポスターです。画面中央に日光東照宮の1/10模型（十代長谷川喜十郎作、現・櫻山八幡宮蔵）を配し、四隅に古式神輿渡御祭行列人形を描いた作品です。「日光を見ずして結構と言ふ勿れ」（原文ママ）とのキャッチコピーで注目を集め、1日20万人を集めた伝説的な催し物として知られています。

4

高岡 徳太郎
ばら
1958（昭和33）年
52.0×44.5
油彩・カンヴァス
高島屋史料館蔵



バラは、高岡が気に入っていた画題の一つでした。そのため、数多くのバラを描いた作品を遺しています。本作はその一例で、画面いっぱいに色や形状の異なるバラを描き、背景の綺麗なグリーンがそれぞれのバラの美しさを引き立たせています。本作は、バラの上品な美しさを表した作品です。

5

高岡 徳太郎
高島屋 バラの手提げ袋（高岡徳太郎デザイン）
1980～2006（昭和55～平成18）年
38.5×31.5×11.5
高島屋史料館蔵

高岡がデザインした「モダンローズ」の輪バラを印刷した手提げ袋。高岡がデザインしたバラの図案は、高島屋の創業150年記念に依頼を受けてデザインしたもので、高島屋にとっては三代目バラの包装紙のデザインでした。三代目バラは1980年から2006年の間に使用され、現在使用されているバラは四代目になります。現在も高島屋のシンボルフラワーとしてお客様に愛されています。



6

千利休ローズちゃん

2006（平成18）年

63.0×26.0×24.0

高島屋史料館蔵



7

与謝野晶子ローズちゃん

2006（平成18）年

60.0×23.0×23.0

高島屋史料館蔵



作品6と作品7は、2006年に堺市の政令指定都市移行を記念してつくられました。

III

二科会再建から一陽会結成へ

高岡は、高島屋大阪店宣伝部での仕事と信濃橋洋画研究所での勉強を両立しながら自身の作品を見つめ続け、1924（大正13）年に初めて第11回二科展に入選します。1935年の第22回二科展では、滞欧中に描いた《田舎》（作品1）と《踊子》（現・芦屋市立美術博物館蔵）などを特別陳列し推奨を受け、翌年には会員に推挙されるまでに実力を伸ばしました。しかし、戦争が激しくなるに伴い、二科会は解散を余儀なくされます。

1945（昭和20）年8月15日、高岡は疎開先の奥多摩の梅沢にて終戦を迎えます。終戦から僅か二日後、二科会会員の東郷青児（1897～1978）から二科会の再建について協力を仰がれます。東郷の熱意に共鳴した高岡は上京し、東郷と一緒に資金調達や会員集めなどを行い、二科会を復活させることに成功します。しかし、1955（昭和30）年、東郷に金銭上のトラブルに対する不信感をもった高岡は二科会を脱会し、野間仁根（1901～1979）と鈴木信太郎（1895～1989）と一緒に新しい美術団体「一陽会」を結成します。結成後、高岡は新しい環境の中で、改めて堺の港風景を想起させる犬吠埼（千葉県銚子市）の風景や親交のあった人物たちの姿を描くことで独自の作風を確立していきます。

本章では、二科会から一陽会の会員時に描いた河川や港風景、そして人物をとおして、高岡独自の作風をみていきます。

8

高岡 徳太郎

裸婦1

1951（昭和26）年

162.0×130.3

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第36回二科展



10

高岡 徳太郎

淀川

1962（昭和37）年

130.3×162.0

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第8回一陽展



9

高岡 徳太郎

岩

1953（昭和28）年

91.0×116.7

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第38回二科展 会員努力賞



11

高岡 徳太郎

松林

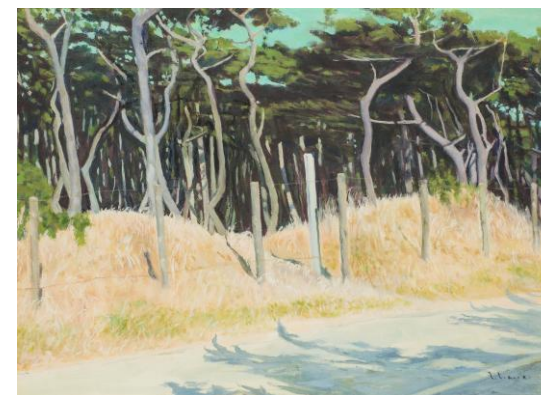
1976（昭和51）年

53.0×72.7

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第22回一陽展



犬吠埼（関東・銚子半島の最東端）の風景で、高岡が岩の面白い形に惹かれ描きました。敢えて岩をモチーフにする点に、高岡の独創性が認められます。画面手前に配した異なる形の岩の重なりを強い陰影で表現しています。コバルトブルーの海から開けた空へと向かう構図は画面に奥行きと広がりを与えています。

犬吠埼に隣接する君ヶ浜は、白い砂浜と砂丘上にある緑の松林による壮観な風景が特徴です。高岡は、松林を幼少期の頃にみた堺の港風景と重ねていました。道を隔てた場所には多くの松林が植わっています。木の葉の影が道路に落ち、時の移ろいを感じさせる作品です。

12

高岡 徳太郎
辻本敬三氏像

1978（昭和53）年

72.0×59.0

油彩・カンヴァス

堺市蔵

辻本敬三は、堺で創業した福助株式会社の社長を務めた堺ゆかりの人物で、高岡の友人の一人でもありました。本作は、氏の八十歳と八十八歳を祝うために描かれた作品です。



13

高岡 徳太郎

漁村

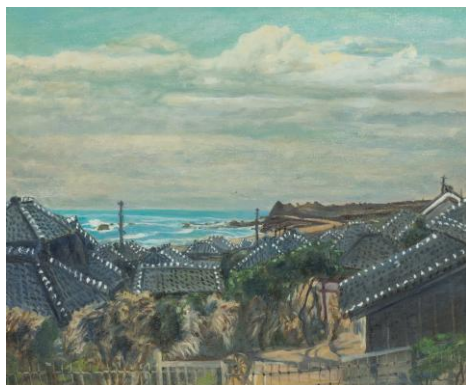
1979（昭和54）年

50.0×60.6

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第25回一陽展



犬吠埼の漁村を描いた作品で、高岡は海だけでなく漁師町の風景や町から見える海の眺めも好んで描いていました。瓦屋根の家が隣接する中に小さな鳥居がある簡素な風景、そして画面奥には海と空が広がっています。晩年、高岡は日常生活の中にみられる自然な風景に心惹かれ、カンヴァスに投影した作品を多く制作しました。

14

高岡 徳太郎
犬吠の海 二

1989（平成元）年

72.7×91.0

油彩・カンヴァス

堺市蔵

第35回一陽展



15

高岡 徳太郎

犬吠埼灯台

1991（平成3）年

72.7×91.0

油彩・カンヴァス

堺市蔵



本作は、高岡の絶筆に当たる作品です。海を挟み犬吠埼灯台を望んだ壮大な景観を描いています。高岡にとって海は、堺の港を想起させるモチーフであり、場所は違えども幼少期を追憶する風景でした。全体的に黄色みが強く出ているのは、眼の病気の影響によるものです。それでも海を描き続けた高岡の画家としての執念を感じます。